

ムッシュー・グルジェフの日課

(チェスラヴ・チェコヴィッチの回想録より)

ムッシュー・グルジェフは、親切心ゆえに人になにかをしてやると受け取られることを嫌悪する珍しい人物だった。だが、それならば、彼が人に対してあれこれのことをしてあげるとき、その背後には、どんな意図や目的があったのか？

これについて私が言えるのは、ふつうの意味で「親切」というのは、彼にはあてはまらないということだけである。とくに生徒たちとの関係ではそうだった。だが、彼は不親切だったと言いたいのでもない。むしろその正反対だった。ただ、ふつうに思われているような親切ではない。[...]

もっとも、[生徒以外の]よその人たちに対しては、彼はふつうの意味でも「親切」だった。[...]

* * *

私は[ザルツマン夫人の生徒たちとは]別の時間帯に彼のアパートマンに行くことが多かったので、日中に彼が何をしているのかを知ることができた。ふつう朝にはひとりで散歩にでかけ、これは仕入れを兼ねていた。そして家に戻ってくると、キッチンでの労働が始まる。ムッシュー・グルジェフはこの仕事にかかりきりになり、この時間帯にはめったに来客の訪問を許さなかった。

そして実際、一日のうちまだ早い、この何時間かのあいだ、ホールの大階段とつながった廊下に面した表玄関の扉が開くことはめったになかった。ところが、キッチンに隣接する裏口の扉はしょっちゅう開いたり閉じたりしていた。

ある者は器を手に、ある者は鍋を手にして、食べ物を分けてもらいに来る人たちが絶えなかった。そういう人たちに対応するとき、ムッシュー・グルジェフはふつうまず、[その人の家族など]食べ物を必要としている人の健康状態について尋ねた。その後で、「アアア.....ボン・ボン・ボン.....それならこれを食べさせなさい」と言う。彼は各自の器や鍋にキッチンの巨大な鍋から料理をよそった。[...]

昔はロシアの貴族だった老婦人が戸口にあらわれ、もったいぶった言葉をもってムッシュー・グルジェフにあいさつした。ムッシュー・グルジェフは、彼女から器を受け取ると、彼女の夫の健康状態について尋ねた。彼女はそれに答えず、自分を卑下して相手を奉るような言葉を連発するのをやめなかった。ムッシュー・グルジェフは、どの料理を分けようか決めかね、彼女の言葉をさえぎると、さっきよりふっきらぼうに同じ質問をくりかえした。彼女はようやく質問に答え、ムッシュー・グルジェフは料理をよそった。すると彼女はふたたびもったいぶったお世辞をくりかえした。

それを聞いて私は恥ずかしくなり、これはまずいことをしているのだと彼女にわからせようと、彼女のほうに足を踏み出した。ところが、彼女はお世辞を言うのに夢中で、それを制止しようとする私にも気づかず、あなたのおやさしさはまるでなんとかのようですとムッシュー・グルジェフに言うのだった。そ

のなんとかという言葉は私は聞き逃した。ムッシュー・グルジェフが彼女の言葉をさえぎったからである。

「あなた、あなたの夫、あなたの両親、あなたの種族は、上に立つ者の尻をなめることで身を立ててきた。ロシアを逃れてから、もう長い年月がたっているだろうに、いまだにこのいやらしい習性から逃れられない。そのようなあなたを見て、私はぞっとせずにいられない」

老婦人は困惑し、そんなわけではないと弁明し、その場を離れようとした。ムッシュー・グルジェフは言った。

「アデマ！」[またあした]

* * *

これは連日の光景だった。午前中、裏口には行列ができ、それが絶えるのは午後の一時ぐらいだった。ときには午後遅くにも、こうしてやってくる人がいた。ムッシュー・グルジェフは、それとは別に大量の料理をこしらえ、アパルトマンを訪れる生徒たちやそれ以外の常連たちにふるまった。彼の食卓には数々の料理が絶えることなく、[彼に言わせると]それらは世界の各地からふんだんに届くのだった。南フランスから、スペインから、トルコから、オーストラリアから、南北アメリカから、ときにはアフリカから。だが、たまにひとりきりの晩は、まったく食べていないみたいだった。

* * *

家を出るときにはかならず、子供たちのためにボンボン[あめ]やお菓子をポケットにふんだんに詰めていた。母親に連れられた子供を見かけると、まず子供にひとつボンボンをあげる。その子がそれを母親に渡したなら、その子にあとふたつボンボンをあげた。そうでなければひとつだけである。母親が子供から渡されたボンボンをあとで子供に返したなら、今度は母親のほうが余分にボンボンをもらった。ムッシュー・グルジェフが散歩に出かける界隈の子供たちとその親たちは、みんな彼のことを知っていた。サンタクロースにも似たおじいさんとして、ムッシュー・ボンボンと呼ばれていた。

(Tchesslav Tchechovitch, *Tu L'Aimeras - Souvenirs sur Georgii Ivanovitch Gurdjieff*, p. 226-228)

最後の段落のみ英語版から。同書は仏語版と英語版で編集や収録範囲が異なる。